



ロンドンに舞う、 和歌山の妖精

©Rimako TAKEUCHI

身長156センチは女子体操選手としては大柄だが、その分演技が伸びやかに優雅に見える。またローティーンの選手が多い中、24歳という年齢で活躍するその姿は後進に好影響を与える存在としても期待されている。



©Rimako TAKEUCHI



普段から仲がよく、子どもの頃から喧嘩したことがないという。願掛けで会場には来ない母のためにも、「テレビに写るようないい成績を残さなきゃ」とガッツポーズの和仁(左)、理恵(中)、祐典(右)の3選手



©Rimako TAKEUCHI

2010年、第42回世界体操競技選手権大会において、個人総合に参加した選手の中でもっともエレガンスな選手に与えられるロンジン・エレガンス賞を受賞し世界中から注目を集めた。



笑顔の奥にある 確固たる決意とゆるぎない愛

しなやかに伸びた肢体。躍動感あふれる跳躍。ダイナミックな演技。誰もを魅了する笑顔。日本女子としては初めてのロンジン・エレガンス賞を受賞し、世界から最も注目を集める女子体操オリンピック候補、田中理恵選手だ。

理恵選手が体操を始めたのは6歳の頃。元体操選手である父が教える和歌山オレンジ体操クラブに所属する兄の和仁選手に憧れてのことだった。幼かった弟の祐典選手も兄のスピード感溢れる演技を見ているうちに体操を始めていた。「そんな体操一家を支えたのは母でした。放課後になるとすぐ母の車に乗

り、練習場所の和歌山北高校の体育館に行きます。その車中で食べた母のお弁当が、私と兄弟の一番の思い出です」と語る理恵選手も高校時代はスランプに陥った。気持ちと身体のコントロールが上手くいかない。活躍する兄弟に取り残されているような気持ちにもなったという。「それでも両親は練習から離れると一切、体操の話をしませんでした。そして家では一緒に遊んでくれる優しい父に戻ります。ところがいつの間にかトレーニングになっていくんです(笑)。我が家では初詣が走り初め。兄弟と近くの山にランニング、そこから毎年、初日の出を眺

和歌山オレンジ体操クラブ

昭和51年に設立された田中和仁・理恵・祐典選手の父、田中章二が指導する体操教室。平成20年には文部科学大臣表彰を受賞した名門クラブ。現在も県立和歌山北高校の体操部と一緒に練習を重ねている。



教員になった後も32歳まで体操競技を続けた。全日本インカレや国体、全日本選手権にも出場した経歴を持つ。